

お正月に欠かせない縁起物 しめ縄作り協力会

お正月を迎え、神棚に「しめ縄」を飾っている家も多いことでしょう。中には自分で作っているという人もいると思いますが、このしめ縄を、町の老人会の仲間が毎年作っていることをご存じでしょうか。

今回は、誰もが忙しくなる年末に合間をぬってしめ縄作りに励む、しめ縄作り協力会の皆さん（青柳一富会長）に話を伺いました。

しめ縄作り協力会は、6年前に社会福祉協議会で開催された『しめ縄作り講習会』に参加した老人会員の中から、「やってみようか」と声を掛け合った6人で始め、現在は12人で活動しています。

今年で5年目を迎えましたが、現在のしめ縄りのような形になるまでには、様々な苦労と研究があったようです。材料となるワラは、最初コシヒカリのワラを使っていた。研究の結果、現在は黒米のワラを使用し、栽培は毎年持ち回りで、会員の田んぼの一部にしめ縄用に植え付けています。「一番難しいのは、色を緑色に保つことです。」と話して

今月の輝ける星



「しめ縄は、予約制で毎年開催される『健康福祉祭り』で展示し、受付を行っています。大きさは2尺から9尺で、一番大きな9尺のしめ縄は、愛宕神社や高尾神社にも奉納されています。また、売上金は社会福祉協議会に寄付しています。会員の皆さんは、「みんなが集まって、世間話をしながら作るのが楽しいんです。」「縁起物として飾り、皆さんが幸せになるといいですね。」などと話し、予約した人に手渡す日に向け、一つひとつ心を込めて作っていました。

いました。また、飾りも神社などに飾ってあるものを、よく観察し改良してきました。しめ縄は、予約制で毎年開催される『健康福祉祭り』で展示し、受付を行っています。大きさは2尺から9尺で、一番大きな9尺のしめ縄は、愛宕神社や高尾神社にも奉納されています。また、売上金は社会福祉協議会に寄付しています。

知っていますか？ 上三川町のこんなところ

■ かぶと塚古墳と愛宕塚古墳

「凝灰岩」をご存知ですか。大谷石に代表される、火山灰が固まってできた石のことです。この石は宇都宮北部で採掘され、塀や蔵に使われているのは上三川町でも良く見られる風景。しかし、凝灰岩がたくさん使われるようになったのは、機械が発達した明治時代以降のことです。

ところが今から約1300年前に、上三川町に大きな凝灰岩が運ばれていました。それが、かぶと塚古墳と愛宕塚古墳の石室に使われている石です。今では2つの古墳を覆っていた土が除かれ、外側から石室を観察することができます。

ところで、この古墳に使われている石の重さはどれくらいあるのでしょうか。かぶと塚古墳の一番大きな石は、1.9m×4.1m×0.5mあります。20cm×20cm×10cmの大谷石の重さを量ると約7.3kg。とすると、この石の約1000倍の古墳の石は約7tもあることとなります。

今なら、ダンパーやクレーンを使えばこの石を運ぶことができますが、機械のない時代に、どうやって持ってきたのでしょうか。

